

今こそメディアリテラシー

鹿児島県 NIE 推進協議会事務局長 岩松マミ

2016年を象徴する言葉として、英語辞典のオックスフォード英語辞典が「ポスト・トゥルース (post-truth)」を選んだことが話題になった。世論の形成において「客観的事実が、感情や個人的信念を訴えるものより影響力を持たない状況」を意味する。英国の欧州連合 (EU) の離脱や米大統領選を報じるメディアで多用された。

「事実を見て客観的に判断するのではなく感情が優先」。新聞社の読者応答の窓口において、読者の苦情を受けるたびに、そんな風潮を肌で感じていたので、言葉が胸にストンと落ちた。「南京虐殺は作り話。日本をおとしめるウソを書くな」「沖縄の基地反対運動をするのはお金をもらっているプロ市民」。

根拠となっているネット情報の大半は個人のブログに載っていた内容で、自分で見聞きしたり調べたりしたわけではなく、あちこちの情報を切り取り都合よく並べたものだったりする。そもそもの根拠を尋ねると「ネットにあるから本当なんだ」と怒鳴る人もいる。

「事実を見て判断する」どころではなく、事実はどうでもよく、「ただ自分に耳障りのいいこと、信じたいことだけを信じる」風潮に危惧の念を抱いていた。

そんな矢先、IT大手が情報サイトで根拠のない記事やコピーによる著作権侵害の疑いのある記事を、膨大な数載せていたことが判明し、サイトを休止させた。幹部が「記事の正確性より利益を優先させた」と謝罪会見で述べていた。

記事を書く時、記者は必ず、事実かどうか本人や関係者に確認する「ウラ取り」をする。都合の悪い嫌な話だと、関係者が姿を消してしまい、必死で接触を試みる。複雑な内容だと関係各所に確認する。時間と手間がかかる作業だ。しかしそこに事実の重みがある。私たちは不確定な情報や噂だけでは記事にしない。読者との「信頼」で仕事をしているから。

SNSの浸透で、だれもが情報を発信できる時代になった。さらにはわざと「うそニュース」を流し問題になるケースも増えている。何が本当のことで信頼できるのか。ますますメディアリテラシーが重要になっている。未来を担う子どもたちに、情報に潜むものをかぎわけ、批判的に見る力、正しく情報をつかむ力をつけてほしい。まさにNIEの出番だ。